

「朝の読書運動」から
「家読」「子ども司書」へ

引き継がれる 「本を読む」重み



多くの小学校であたり前のように行われている「朝の読書」。この運動に草創期からかかわった佐川二亮さんに、その原点についてとっておきの話をまとめていただきました。

執筆 家読推進プロジェクト代表（朝の読書推進協議会元事務局長） 佐川 二亮

「朝の読書」が求めたもの

授業前の10分間、毎日、全国の学校で子どもたちがめいめい「朝の読書」を楽しんでいます。この「朝の読書」は、1988年に千葉県・船橋学園女子高校（現・東葉高校）で社会科を教える林公教諭（2013年12月死去）が提唱し、体育科担当の大塚笑子教諭の実践で始まったものです。26年も前のことになりましたが、学校現場で「朝の読書」に取り組みおられる方々のために、この活動の意味と役割について改めて考えてみたいと思います。

1980年代初めに「ファミコン」という新型テレビゲームが登場しました。当時は、子どもばかりか大人までもがテレビ画面にくぎ付けになる社会現象がおきました。しかし、刺激的で面白いメディアほどさまざまな危険性を伴うことを覚悟しなければなりません。ゲーム漬けで育った子どもたちが感情のコントロールができなかったり、コミュニケーション能力が希薄になって引きこもりや不登校を引きおこしたりしているからです。さらに、いじめや少年犯罪増加の要因にもなっていることも理解しなければなりません。

子どもたちの心が荒んでいくのを見て、「これは教育以前の問題で、豊かな心を育むには自

ら主体的に学ぶ姿勢をつくる必要がある」と、林教諭は生きる力を育むための教育実践を模索しました。試行錯誤を重ねながらたどり着いたのが「読書による心の安定」でした。「みんなで作る」「毎日やる」「好きな本でよい」「ただ読むだけ」というシンプルな方法で、「朝の読書」を組み立てたのです。読む本は自分で選ぶ、感想は求めないという自由で公平な「朝の読書」は、読書習慣のなかった子どもたちにも抵抗なく受け入れられることになったのです。

短時間でも毎日実施することで、「読書が好きになった」「集中力がついた」「読解力がついたら」「国語力が向上した」などさまざまな効果が表れます。とくに「読解力」効果が学力向上に貢献することになりました。それまで「朝の読書」の「学力向上」についての検証は行われていませんでしたが、広島大学大学院教育学研究科の山崎博敏教授らが2007年4月に実施された「全国学力・学習状況調査」の分析を用いた共同研究で、「朝の読書をよく実施している学校の児童は、実施していない学校の児童に比べて、授業が好きであり、学習意欲が高く、教師と児童の間に良好な人間関係が形成され、国語・算数・数学のテストの合計得点からみた学力が相対的に高い。知的な活動だけでなく、コミュニケーションや感情・情緒の基盤でもあり、児童生徒の人間形成にも大きく寄与す

る」（学力を高める「朝の読書」メディアパル刊）と検証されたのです。

「朝の読書」は「学力向上」ばかりか、「人間形成」にも寄与するということが、学問的に立証されたことは意義深いことでした。



栃木県大田原市立宇田川小学校
五年生の教室の「朝の読書」風景

学校から家庭の読書へ

「朝の読書」は現在、全国小中高校28000校（朝の読書推進協議会「調べ」で実践され、約1000万人の児童生徒と約80万人の教師が取り組んでいます。全国でくまなく実施されているとはいえ、毎日実施している学校は34%。一週間1〜2回程度が35%を占め、これでは成果を求めるといえることは、はなはだ難しいと思われれます。

実践で大切なことは、先生も教室で一緒に本を読むことです。「朝の読書」を子どもたちだけにやらせて、先生は職員室で会議をしている状態では継続が難しくなります。「朝の読書の時間、教室はシーンと静まり返っている。一番騒がしいのは職員室」と子どもたちから指摘されるのははずかしいことです。「先生方が自主的に読書をする姿を見たことがない。子どもに変化を望むなら、大人も変化するべきではないか」と読書担当教諭からの声もあがっています。子どもたちよりも先生方の取り組み姿勢に問題があるのが、近年の傾向のようでもあります。

「朝の読書」が10000校ぐらいに広がった頃、学校現場から「朝の読書で学力に大きな成果があった。この読書習慣を家庭にもつくれたら国語力はさらに向上する。問題は夏休みや冬休みに読書習慣の糸が切れることだ。家庭読書について工夫はしているがなかなかうまくいかない」という課題が寄せられていました。「家庭では大人が本を読まないから、子どもたちも読まなくなる」という意味合いでもあるのです。そこから、「朝の読書の家庭版」が活動の新たな研究テーマとなったのです。

「朝の読書」の理念と方法は、大人の考え方で創り出されました。その家庭版は主役である子どもたち自身の知恵と希望でつくりあげてみ

たいと考えました。家庭（家族）読書、略して「家読」。読み方は「うちどく」と柔らかな名称にしました。

その「家読」をどう組み立てるか、2006年に茨城県大子町で小学六年生6人に「子ども会議」を開いてもらいました。6人の家読プロジェクトは、「最近の大人は読書の楽しさを知らないね」と厳しい意見を交わしながら、5つの約束事を考えてくれました。

- ・ 家族で同じ本を読もう。
- ・ 読んだ本で話そう。
- ・ 感想ノートをつくらう。
- ・ 自分のペースで読もう。
- ・ 家庭文庫をつくらう。

茨城県の山間の小さな町の小学六年生たちが全国へ発信した、この「家読」運動は、徐々に各地の自治体で取り組まれるようになります。2013年には、文部科学省が策定した「第三次子ども読書活動基本計画」に、「普及啓発活動として推進」することが明記されました。子どもたちの読書運動が国を動かした、といえるでしょう。

地域ぐるみで読書環境へ

2007年3月、大子町の綿引久男町長（当

時)は、定例記者会見で「家読推進事業」を全国で初めて導入すると発表しました。「家読」を軸に「読書を楽しむ人があふれる町づくり」「読書を通して心の豊かさを育てる町づくり」「読書の素晴らしさを全国に発信する町づくり」をめざす「読書のまち宣言」です。

同時期、佐賀県伊万里市で思いやりの心あふれる町づくりを推進していた塚部芳和市長も、「家庭での会話不足は、子どもたちの心の成長に悪い影響を及ぼし、いじめや不登校につながっている。いじめをなくすには家族の会話を増やすことが最良の方法」と、「家読」政策事業をスタートさせました。さらに東北から、りんごの町で有名な青森県板柳町の館岡一郎町長が「家読のまち」を宣言。大子・伊万里・板柳の3つの町が、「家読先進3自治体」と称されることになったのです。

「家読」施策は、教育委員会や図書館が推進団体になって取り組まれているところが数多くあります。しかし、学校が啓発と活動の拠点にならないかぎり、なかなか発展につながりません。なぜなら、子どもたちと家庭への啓発と活動と検証に学校が実効性があること。さらに、学校と家庭の新しいコミュニケーションづくりが可能になるからです。

「家読」は学校と家庭の連動・協働性によって成り立つものです。したがって「情報交換」が果をあげているようです。「読書推進は、私の教師道を貫くテーマ」と自負する高橋校長の「読書出前授業」に、十日町市教育センターが事業として位置づけて応援が始まったことは素晴らしいことです。

子ども司書への発展

「朝読」と「家読」という2つの運動を有機的に発展させたのが「子ども司書制度」です。この制度は福島県矢祭町で提唱されました。小学校中学年から中学生に本の世界を学んでもらい、学校や地域で読書の楽しさや大切さを推進していくリーダーを養成するというものです。「子ども司書制度」の詳細については、本誌2013年10月号で特集されています。

従来の子どもの読書活動は、大人の考え方や伝え方に支配され、子どもはつねに受け身の立場でした。そんななかで子どもたち自身で読書活動に主体的に取り組む環境をつくらうというのが、この制度のねらいです。

具体的には教育委員会や図書館が運営する養成講座を開催します。夏休みなど短期間で開催する地域や、一年間の長期講座を組むところもあります。講座を修了した子どもたちには主催者から認定証が授与され、学校や地域の協力を得て、子ども司書としてさまざまな読書活動

重要なキーワードになります。

例えば大子町の全学校では「家読だより」を発行して、学校からの情報と家庭からの意見を交差することで、学校と保護者の「コミュニケーションツール」に役立てています。

また地域活動の見本は、伊万里市黒川公民館の事例。2007年に伊万里市が「家読」を政策事業としてスタートさせたときから市の家読モデルの拠点として指定され、地区の住民や学校が町おこしのごとく積極的なボランティア活動を展開しています。入り口に「家読の町」をアピールする路上看板を建て、公民館と住民らが定期的に総会を開いて「家読」の状況を確認したり新規の活動を話し合ったりしています。情報インフラとして「黒川町うちどくだより」を全戸に配布。2010年には絵本700冊を揃えて、「絵本の花畑」という図書室を公民館内に開設しました。現在、読書活動で全国に名高い伊万里市民図書館の応援で、絵本や児童書を主体にした約3000冊の家読応援図書が備えられています。「朝読」も「家読」も読みたい本を身近に揃えられるかどうかが活動の生命線です。

「家族で同じ本を読んで、感じたことを話し合う」ことが「家読」のねらいです。そのための素材には、「絵本」が最適です。絵本なら家族全員が容易に読めるし、物語と絵の両面から話

に関わります。東日本大震災で避難している子どもたちを励ます読書交流をして、心の励ましを行ったりもしています。いずれ全国の学校図書委員が子ども司書で構成され、子どもたちが子どもたちのための読書サポーターになってくれれば、と考えています。そのために、全国子ども司書基準になるような「子ども司書マニュアルブック」の制作に仲間たちが取り組んでいるところです。



平成 25 年度の子どもの司書の認定を受けた青森県野辺地町の子どもたち

今年3月、文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学習状況調査」の結果を活用した「学力に与える要因分析に関する調査研究」(国立大学法人お茶の水女子大学)が発表されました。この調査分析によって、「家庭の社会的背景(家庭所得・父親学歴・母親学歴)」が子ども

題づくりができるという利点があります。何よりも、絵本には人間が生きていくうえで必要とされるすべてのテーマが含まれており、話題が豊富です。大人の方も大いに絵本に親しんでほしいと思います。「朝読」時間に先生が絵本を読んでいたら、休み時間に子どもたちと楽しいコミュニケーションが発生することうけ合いです。



親子で家読を楽しむ佐賀県伊万里市の家族

学校の読書活動にも多様性が出てきました。新潟県十日町市立中条小学校の高橋しげ子校長は、かねてから学力向上に読書活動は不可欠と判断し、前任校時代からさまざまな工夫を凝らした実践を行ってきました。「家読」については、市内2つの中学校区の全学校が連携して保護者に対して「家読」推進活動に取り組み、その延長で始めた「楽しい読書出前授業」が成

もの学力に比例する傾向だけでなく、不利な環境でも「読書や読み聞かせ」と「親子の会話」に学力効果があることが明らかになりました。「読書」の学力向上効果については、広島大学大学院の山崎教授らによってすでに実証されていることですが、この調査で関心を引かれたのは、「親子の会話」「子どもとのコミュニケーション」の効果に調査が及んでいることです。学校での出来事や友達のこと、社会の出来事などを話し合っている家庭の子どもの学力は高い傾向にあります。ただ、この傾向も「朝の読書」の現場です。20年も前に、「朝の読書で読んだ本について家庭で親と話す児童・生徒は、生活態度も良好で学力も高い」と、立証されていました。その「親子の会話とコミュニケーションづくり」の提案が「家読」運動になったのです。

教科書や参考書によるつめ込みの知識も必要でしょうが、読書や親子の会話・コミュニケーションが学力向上に結びつくことを、行政も学校も保護者も改めて認識すべきではないでしょうか。「読書は学校教育の土台であり、生きる力と人間性を豊かにする栄養素である」とは、「朝の読書」の初期運動に取り組んだ志ある教師らが肝に銘じた言葉でした。

※全国の「家読」「子ども司書」情報はHP「うちどく.com」を参照ください。